

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

思いだす。五年前の春。二度目の告白。

小六の椎太。小六の私。異性に身がまえばはじめる年ごろにあつて、私たちはまだまだ無邪気なほうだったと思う。

小三、小四とクラスがはなれていた椎太のことを、当時の私はまださほど

X

見つめていたわけではなかつた。小一でめばえた淡い恋心をあたためつつ、ときどき

ほかの男子に移りたり、体育の先生にそこがれたり、アイドルと結婚してふたごを産む将来計画をヒグチに語ってきかせたりしていた。

思えば、あのころの「好き」は、ネギとメンマだけのラーメンみたいなものだった。後味さっぱりの醤油味。やみつきになるどろどろのスープも、脂こつてりのチャーシューも、胃にのしかかる煮卵もない。

澄んだスープの中を漂っていた私は、小一のときの失恋さえも、

Y

遠いむかしの話として処理していた。とうに治ったみみずばれみたいなもの。だからこそ、

小五でふたたび椎太とおなじクラスになったとき、「楽しい二年間になりそう!」といとも軽やかに浮かれることが

できたのだ。

ところが、実際に新学期がはじまると、五年一組は思ったほど楽しいクラスではなかつた。担任が点数主義のAIロボットみたいな人だったこと、クラスメイトの多くが塾や習い事に通いだして忙しくなったこと、世話好きのまとめ役がいなかったこと——いろんな要素が相まって、五年一組を和気藹々から遠ざけた。だれもがグループの輪に閉じこもり、おなじ顔ぶれとだけ交わって、必要以上のコミュニケーションを厭う日々。

そのグループからあぶれてしまった中村くんという男子がいた。

極度におとなしかった中村くんは、ほかの子に話しかけることも話しかけられることもなく、いつも一人ではつんといた。勉強はよくできるやせっぽっちの男の子だった。クラスメイトたちは人畜無害な彼を攻撃しないかわり、いてもいなくてもいい存在として冷たく黙殺した。椎太以外は。

「中村、宿題やった?」

「中村、『ジャンプ』の今週号、読んだ?」

「中村、寝ぐせついてんぞ」

活気のない五年一組で唯一^{ゆいいつ}元氣をもてあましていた椎太は、自分の視界に元氣のない子が存在することに耐^たえられなかったのかもしれない。毎日のように声をかけては、ひとりぼっちの沼^{ぬま}から中村くんをひっぱりだそうとした。男子たちからしらけた目を向けられても、当の中村くんからめぼしい反応がなくても、めげずに「中村」「中村」と呼びかけつづけた。^Aそれは同情や正義感ではなく、弱きを守る野性の反射神経のようなものだったのではないかと思う。

同時に、五年一組のさめた空気とも椎太は戦っていた。本人がそれを自覚していたかはともかくとして。

「椎太って、強いね。流されないんだね」

ある日、私がしみじみつぶやくと、椎太はへんな顔をした。

「流されるって、どこに」

「どこって……そういう話じゃなくて」

「じゃ、どういう話だよ」

「流されないって話」

「だから、どこに流されないのかわかるように言え！」

^B少年・椎太とは会話が成立しないことも多かったけれど

ど、流されがちな自分にはできないことをやってのける彼に私は改めて惹^ひかれ、恋のスープは多少複雑な風味もまじえてぐつぐつ煮つまりだしたのだった。

一方で、椎太のがんばりもむなしく、中村くんはしだいに学校を休みがちになった。季節が移ろうほどに欠席は増え、中村くんのいない教室があたりまえの光景となつて、ついに、クラス替えもなく持ちあがりで六年一組になった春、担任のロボが皆^{みな}に告げた。

「中村くんはフリースクールへ通うことになりました」

浅い驚^{おどろ}きが教室に広がる中、とつさに私は窓ぎわの席にいた椎太をふりむいた。

中村くんは学校をやめたのか。なぜやめたのか。いったいどこのフリースクールへ行くのか。椎太ならばロボを質問せぬにすはずだ。

が、椎太はそうしなかった。教室のざわめきをこぼむように、彼は感情を押し殺した顔で窓の外をながめていた。

その日一日、あきらかに口数が少なく、あきらかに笑顔が弱々しく、あきらかに給食を食べるのがいつもより遅^{おそ}かった（おかわりもしなかった）椎太が気になってたまらず、放課後、私はこっそり彼を尾行^{びこう}した。椎太は中村くん

に会いに行くんじゃないか。そんな読みもあった。

ところが、予想に反して、椎太の足は中村くんの家へは向かわなかった。かといって自宅へ向かうでもなく、ぶらぶら川沿いを歩いたり、意味もなく商店街をぬけたり、見るからに「まっすぐ家に帰りたくない人の歩き方」で町をうろつきつづけた。つねに前だけを見ている椎太の目が、距離を置いてつけていく私をとらえることはなかった。

ひたすら前進を続けた椎太がようやく止まったのは、町外れのお寺に足を踏みいれてからだ。椎太は何も祈らずに本堂を通りすぎ、奥の母屋を通りすぎ、さらに奥にある庭園の池の前で静止した。

バレーコートの手面くらいはありそうな池。その縁石の前に立ち、椎太が水をのぞきこむ。それっきり、電池が切れたように動かない。

何やってるんだろう？

夕暮れの空の下、椎太の影は池を護る地蔵のごとく留まりつづけ、私はものかげから彼を見ているのいいかげん飽きてきた。

そこで、たまたまそこを通りかかったふりをして、声をかけることにした。

「あれー、椎太？ やだ、ぐうぜん。こんなところで何してるの」

見え見えの小芝居だ。が、椎太は私の言葉を疑わず、ふりむきざまに答えた。

「鯉がいる」

「ふうん」

鯉なんてべつにめずらしくない。そう思いながらも並んで一緒にのぞくと、想像以上にたくさんいた。抹茶色に濁った水の中、光沢のある赤や白の鯉が、うろこをきらきらひらめかせながら泳いでいる。

「ほんとだ、けっこういるね。ここ、初詣でよく来るけど、ぜんぜん気がつかなかった」

やけに静かな椎太に言うと、ぼそとした声が返ってきた。

「鯉のぼりは？」

「え」

「鯉のぼりは気がついたか？」

「初詣で？」

「そうじゃなくて、今日」

会話が成立しない。私は頭の整理をしてからふたたび口

を開いた。

「ええっと、今日、鯉のぼりを見たかってこと？ このお寺で？」

「そ。住職さんちの玄関先^{げんかんさき}にあったやつ」

「ううん、気がつかなかったけど」

椎太の背中しか見ていなかった、とは言えなかった。

「あつたんだ、鯉のぼり。わりとでかいやつ。それ見たあとでこっちに來たら、本物の鯉がいて、びっくりした。

で、俺^{おれ}、なんか考えちゃってさ……」

椎太の声が曇^{くも}る。とちゅうで言いよどむなんて椎太らしくない。

「何を考えたの？」

「鯉のぼりって、本物の鯉が見たら、どう思うんだろうなって」

「本物の鯉が……鯉のぼりを見たら？」

「俺、鯉の気持ちになったら、なんかどんよりしちゃった」

スニーカーのつま先で池の縁石を軽くけりながら、椎太は冴^さえない表情で続けた。

「だってさ、自分たちをぶよぶよにふくらましたみたいな

やつが、糸にくくられて、竿^{さお}にくつつけられて、空でひらひらしてんだぜ。鯉にしてみりゃ悪夢じゃん。人間ヴァージョンの鯉のぼりとかあったらこわくない？」

椎太の言う人間ヴァージョンを頭に描^{えが}き、私は深々うなずいた。

「ん。たしかにホラーだね」

「だろ。しかも、お父さんとお母さんと子どもたちと、家族で見せもんにされてんだぜ。人間ってひどいことするよなあ。俺、鯉の気分になって、人間社会にむかついた。なにが『屋根より高い鯉のぼり』だよ。屋根より高く上げんなよ」

椎太は鯉の立場から本気で人間社会に憤^{いきどお}っているらしく、縁石をける足が徐々^{じょじょ}に力を増していく。それに反応するように、池の中から赤い尾がはねあがり、こまかい水しぶきを宙に散らした。鯉の世界にも元気のいいのがいるみたいだ。

「でもさ、人間もそうだけど、鯉だっていろいろなじゃないのかな」

冷たくなってきた風に吹かれながら水の波紋^{はもん}をながめていたら、ふとそんな言葉が口について出た。

「中にはさ、小さな池で生きるより、空を飛びたい鯉だっているかもしれないよ」

「空？」

「うん。池の鯉より、空飛ぶ鯉になりたい鯉。そんな鯉が鯉のぼりを見たら、意外と、わくわくするかもよ。あそこ
に夢をかなえた鯉がいる、って」

そんなわけないか。言っただけから恥^はずかしくなったけど、ふと横を見ると、縁石をける足が止まっていた。

「そっか」

「え」

「なるほど、そう考えればいいんだ」

力強くなずく椎太の顔からは、さっきまでの翳^{かげ}りがころっと消えている。

「だよな、^Dどうせだったらポジティブな鯉の気分になったほうがいいよな。うん、それ採用。俺もこれからそう思うことにする。夢をかなえた鯉……つまりアレだ、鯉のぼりは鯉たちの自由の女神なわけだ」

悪夢から自由の女神へ。いともスピーディーな転換^{てんかん}にあっけにとられる私の横で、椎太は「うん、うん」とご満^{まん}悦^{えつ}の笑顔でうなずきつつづけている。

^E頭の切り替えが速い男の子。一秒先にはちがうところにいる。いつも私は置いていかれる。だからこそ、まぶしい。

紅^{くれないいろ}色の夕焼けをかぶった椎太に見とれていた私は、

「中村も、ちっこい世界から飛びだして、自由になったのかもな」

椎太の口からふいに飛びだした名前に、はたとわれに返った。

中村くん。そうだ、椎太の浮かない顔には鯉以外の理由もあったのだ。

「中村くんのこと、椎太はいいの？ このままで」

息をひそめて表情をうかがうと、椎太は一瞬^{いっしゅん}だけ瞳^{ひとみ}をこわばらせた。

「ま、ちよつとくやしいし、さびしいけど、でも、中村がいいならいいよ」

「ほんとに？」

「ん。フリースクールってどんなところかよく知らないけど、フリーってからは自由なんだろう。中村が今までより自由になって、楽になるなら、そっちのほうがいいよ。むりして通いたくない学校に通うことないし」

「そっか……ん、そうかもね」

椎太はそんなことを考えながらあの長い道のりを歩いて
いたのか。そう思ったら胸がぎゅっとして、私はことさら
に声を張った。

「そうだね。みんながおなじ公立学校に行かなきゃいけな
いわけじゃないもんね」

「そう、そう。道はいろいろあっていいよ」

「うん。なんか、学校にいと、ここだけがすべてって
思っちゃうけど」

「学校なんて池だよ、池。中村は海にくりだしたんだ。あ
いつ、意外と冒険家だったんだ」

私たちは妙に意気投合し、世界は広いという話でもり
あがっていったのだけれど、そうした話題とはまたべつの

次元で、私はひそかにじんとしていた。椎太と会話が成立
している！

椎太と言葉が噛み合った。菌車が合った。心と心がつな
がった——そう、その一方的な一体感私は私を屋根より高く
舞いあがらせ、ぐいぐいとひとつの方向へ導いていった。
今なら私の思いが椎太に届くんじゃないか。告白するなら
会話が成立している今しかないんじゃないか。お寺の神様
も応援してくれるんじゃないか。そうだ、今だ！

（森絵都「ヒカリノタネ」による）

【注】

*ヒグチ——私の親友。

*厭う——いやがる。

問一 空欄

X

Y

Z

にあてはまることばを、次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つゆも

イ ねちっこく

ウ もはや

問二——線部A「それは同情や正義感ではなく、弱きを守る野性の反射神経のようなものだったのではないかと思う」とあるが、椎太の中村くんに対する気持ちとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分がこんなに元気なので、同じクラスの中に元氣のない人がいることが信じられないでいる。

イ グループからあぶれてしまった中村くんを一人ぼっちにするのは、自分のプライドが許せないでいる。

ウ 中村くんの存在を黙殺しているクラスメイトに、中村くんを一人にさせないよう故意に見せつけている。

エ やせっぽっちで一人でいる中村くんがとても弱く見えるので、守ってあげることが当然だと思っている。

問三——線部B「少年・椎太とは会話が成立しない」とあるが、私と椎太は「流される」の意味をそれぞれどうとらえているのか。説明しなさい。

問四——線部C「椎太の背中しか見ていなかった、とは言えなかった」とあるが、なぜ私は「言えなかった」のか。理由を説明しなさい。

問五 — 線部D「どうせだったらポジティブな鯉の気分になったほうがいいよな」とあるが、ポジティブな鯉の気分になると、椎太は中村くんのことをどう考えられるようになるのか。椎太の考えとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 中村くんが人畜無害のままフリースクールに行けて良かったと考えられるようになる。
イ 中村くんはフリースクールに行くことで、自由になったのだと考えられるようになる。
ウ 中村くんは夢をかなえてみんなより先にフリースクールに通うのだと考えられるようになる。
エ 中村くんがよいと思ってフリースクールに行くのだから、さみしくないと考えられるようになる。

問六 — 線部E「頭の切り替えが速い男の子。一秒先にはちがうところにいる。いつも私は置いていかれる。だからこそ、まぶしい」とあるが、椎太のことをまぶしく感じるのはなぜか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すぐに前向きに考えられる椎太は、暗いことしか考えられない私を明るく照らしてくれる人だから。
イ もとの考えにこだわらず、新たな発想にすばやくたどりつける椎太は、私にとってあこがれの人だから。
ウ 私のことなど気にかけずに次の場所へ進んでいく椎太は、競争心に火をつけ、私を高めてくれる人だから。
エ 今よりも素晴らしい世界をまたたく間に想像し、他人を幸せにできる椎太は、私にとって異次元の人だから。

問七 — 線部F「そう思ったら胸がぎゅっとして、私はことさらに声を張った」とあるが、私の「胸がぎゅっとし」た理由を説明しなさい。

問八 — 線部 G 「私はひそかにじんとしていた。椎太と会話が成立している！」とあるが、椎太と会話が成立することがな
ぜ「じんと」するのか。これまでの私と椎太の会話をふまえて七十五字以内で説明しなさい。